

目加田誠先生の『北平日記』

【目加田誠先生】

明治 37（1904）年～平成 8（1994）年

幼少期を山口県岩国市で過ごし、東京帝国大学を卒業し、九州大学教授、早稲田大学教授を歴任し、晩年を大野城市で過ごしました。

中国古典文学研究者として、主に『詩経』をわかりやすく翻訳したことで知られています。『詩経』を含め中国古典文学に関する研究業績が認められ、昭和 60（1985）年に 81 歳で学士院の会員になっています。

また、元号が昭和から平成に変わる際には、新元号案の考案者の一人に選ばれ、「修文」などの案を提出しています。

晩年には光を失いましたが、その寂寥感（せきりょうかん）を和歌に詠み、歌集『残燈』を出版するなど、研究だけではなく、鋭敏な詩的感性を持った人でした。

【北平日記の発見】

目加田誠先生は、昭和 8（1933）年 10 月から昭和 10（1935）年 3 月まで中国北京に留学しました。出発は先生が 29 歳の時で、出発 3 か月前の 7 月に九州帝国大学法文学部助教授に着任したばかりでした。先生は、留学の日々の出来事について克明な日記をつけています。日記は 8 冊に及びますが、各冊の表紙には「北平日記」と書かれています。当時、北京は北平と呼ばれていました。1928（昭和 3）年に蒋介石が南京を首都として、北京の名を変えたからです。



『北平日記』原本

この日記が見つかったのは、平成 24（2012）年夏のことです。その前年の平成 23（2011）年秋に、大野城市は目加田誠・さくを先生ご夫妻の蔵書をご遺族から寄贈していただくことになり、蔵書をご自宅から市内小学校に運びました。目録作成は平成 24（2012）年 4 月から開始しましたが、中国文学専門書の分類については、九州大学文学部中国文学研究室 竹村則行教授（現在同大学名誉教授）、静永健准教授（現在同大学教授）に依頼しました。そして、大学院生や卒業生を中心に整理を進めていた時に発見されました。『北平日記』の存在については、ご家族も知らなかったとのこと。この『北平日記』は、九州大学中国文学会（代表 静永健教授）によって令和元（2019）年 6 月に書籍化されました。



書籍化された北平日記

(『目加田誠「北平日記」』九州大学中国文学会)

【北平日記が長らく見つからなかった理由】

目加田誠先生は、この日記の存在を門下生にも家族にも一切明かされませんでした。もちろん日記ですから他人に教える必要はないわけですが、九州大学文学部教授静永健先生は、いつかこの日記が公刊される日を待っておられていたのではないかと推測され、存在を明かさなかった理由を以下のように考えています。

第一は、当時の時代状況です。昭和 6（1931）年の柳条湖事件、昭和 12（1937）年の盧溝橋事件の間に挟まれて小春日和のような平和な状況が出現していましたが、第二次世界大戦後の日本社会から見れば、学術目的とは言え、国費で行った留学ですから誤解を招きかねないのでその

ままにしておいたのではということです。

第二は、個人的な理由です。目加田先生は家長として家族の世話をしなければならなかったわけですが、国費留学とは言え、日本を離れたことは親族などから誤解を受けないかということです。

第三は、留学期間中交流した中国の知識人は、戦後、日本人と交流していたことを理由に批判されたことから、日記を明らかにできなかったということです。(九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記」』中国書店2019)